

相浦さんの思い出

相浦は「あ」で始まり、今石は「い」で始まるからであろう、法学部のオリエンテーション・セミナー会場に行くバスでは、相浦さんはいつも隣の席であった。その道中いろいろ話をした。奥さんのこと、二人のお嬢さんのこと、飼っている犬のことなど、学校の話より家族の話が多かったように記憶している。相浦さんは決して能弁ではなかった。話される言葉が「するめ」のようで、聞くものがゆっくり噛みしめなければならぬような感じであった。話したこともほとんどは忘れてしまったが、いつだったか、お嬢さんが東京の大学へ入学され、自分が車を運転して引越しをしたという話をされたことがある。野武士のような顔付きからは想像しにくい、子煩悩の一面を垣間見たような話であった。

お酒を飲むと表情がほだけてきて、上を向いて愉快そうに笑われたことも印象に残っている。すぐ赤くなるのに、いつもどおり訛りのある訥々とした語り口であった。いつ頃からだったろう、お酒の席であまり飲まれなくなり、飲まれても表情が以前ほどほだけた感じがしなくなったのは。髪がみるみる白くなり、ほお骨がめだつようになった。おそらく内部で異変が進行していたのだろうと、あとになって思い出す。

研究室も離れていたし、教授会で座る席も離れていたため、しょっちゅう話をしていたわけではない。最後にまとまって話をしたのは、亡くなられる半年ほど前のことだったろうか、昇任人事のことで集まった時で、その顔を間近でみて驚いた。鬼気迫るものを感じないわけにいかなかった。今から思い返すと、最後の気力を振り絞って与えられた任務に当たられていたのだ。その痛々しい姿が、脳裏に深く刻まれていて離れない。

ぼくも今年、相浦さんが亡くなられた歳になった。やり残したことはたくさんあったに違いない。おおきなことでなくとも、お嬢さんたちの成長を眺め、夫婦で人生をゆっくり味わいながら、まだまだ生きていくことを願っておられたらう。訥々とした話し方とは不釣り合いなほど、あまりにも慌ただしくこの世を去られたことが嘘のように思えて仕方ない。

広島修道大学法学部教授 今 石 正 人